

キーワード

桶狭間合戦 長福寺 「古戦場討死人別」 「今川勢討死者位牌」 「林阿弥の弥陀記・鑑記」 「義元公御霊像記」 渡邊玄蕃遺品 六角家援軍 『江源武鑑』 『三河後風土記』 『絵本太閤記』

はじめに

桶狭間合戦をめぐる研究・論評は数多く、古くは江戸時代より考証が重ねられてきた。ただ、古い考証本は、『甫庵信長記』や『絵本太閤記』等による脚色部分を分離していないため、近代以降も虚実綯い交ぜの考証が続けられたが、信長の家臣・太田牛一著の『信長公記』の解析に基づき藤本正行氏の論考^①により、合戦の実態に迫る道筋が付けられた。しかし、それでも『信長公記』の解釈や軍勢配置に関する見解が数多く出されている。本稿はその流れに依らず、地元に残る特異な合戦伝承を検証することを目的とする。

現在の桶狭間古戦場は、羽賀祥二氏が論証されたように^②、東海道沿線にあることで江戸時代より「名所」として顕彰されたため、豊明市の国史跡「桶狭間古戦場伝承地」は今川義元の墓や顕彰碑が林立する公園として整備されている。公園西側の香華山高徳院境内には今川義元の本陣碑もある。ただし、義元本陣の場所については、山を隔てた名古屋市緑区側の新興住宅地となった山の中腹にも碑があり、その西麓には古戦場

公園がある。この公園には近隣より発掘されたという義元の墓碑がある他、周囲には今川勢の陣所や、義元や今川勢の供養を行う和光山天沢院長福寺（以下、「長福寺」という。）が存在する。同寺は義元的首検証を行った場所とされ、本尊の阿弥陀如来像は、首検証を命じられた義元の茶坊主・林阿弥によって合戦後に納められたと伝わる。

二つの古戦場伝承地が所在する自治体が違うこともあり、古戦場、特に義元本陣の場所に関する見解主張は、江戸時代から現在に至るまで止むことはない。現在でもなお本家主張が続くことは興味深い現象であり、管見の限りここまで積極的に本家主張が行われている古戦場は他に無い。予想外の大将討死という合戦譚ゆえに、どうしてもその定点を特定したいという欲求を掻き立てるのだろう。

この古戦場遺跡の一つ長福寺には、他にはない独自の伝承・記録が継承されている。それが本稿で紹介する史料1「古戦場討死人別」（以下、「人別」という。）や、史料2「今川勢討死者位牌」（以下、「位牌」という。）二基、今川方の武将・渡邊玄蕃の遺品類と史料3「林阿弥の弥陀記・鑑記」・史料4「義元公御霊像記」である。このうち「人別」には信長方へ近江国の六角家が援軍を出したとの記述がある。この記録は紙質から判断して古くても江戸時代末期を遡ることはない。後述するように六角家援軍の記述は江戸時代で既に偽書とされた書籍か、俗書の類にしか記されていないため、この記録を基に桶狭間合戦に六角家の援軍が派遣されたと言及するつもりは毛頭無い。

考察の対象は、長福寺のみがなぜ六角家援軍伝承を継承してきたかである。偽書や俗書に基づく誤りの伝承と切り捨てることは簡単だが、合戦当時の状況を鑑みた場合、あるいは一片の事実を内包する可能性も完全には捨てきれない。ゆえに本稿では、これまで展覧会での出品はあるものの、具体的な内容紹介がなかった「人別」・「位牌」・「林阿弥の弥陀記・鑑記」・「義元公御霊像記」を翻刻し、その情報形成の背景を探る。

一 長福寺記録の検証

長福寺は浄土宗西山派の寺院で、緑区側の桶狭間古戦場公園の南方二百メートルの地に立地しており、境内には義元首検証の場や血刀濯ぎの池といった史跡が点在する。今川義元や討死した今川方の武将・松井宗信の木像を安置する他、江戸時代初期以前の製作と考えられる義元の位牌が伝わるなど、合戦に深くゆかりのある寺院としての由緒を誇る。

史料1「人別」は、縦二四〇糎、横一七・二糎の楮紙横帖六丁からなり、右側を紙縫綴とする。ここには「討死人別」として「義元公甥久野半内氏忠」以下、帖末に記載された今川義元を含め、抹消名や重複を除けば四十八人の名を書き上げる。そして、今川方の討死者数を「随一の勇士／五百八十三騎／戦死合式千七百五十三人」〔／〕は改行。筆者加筆。以下同。とする。また、巻末には「此外信長勢討死／九百九十有余人此内式百七拾式人ハ 近江国佐々木方之加勢」とする文言がある。

史料2「位牌」二基はいずれも牌面上幅二〇・九糎、下幅二〇・八糎、高縦三〇・三糎、厚一・〇糎の上部隅丸衝立形位牌で、幅三三・四糎、高六・五糎、奥行四・八糎の二脚渡しの台座が付き、総高は三六・八糎となる。位牌面及び台座には黒色塗料が塗られ、文字は朱書きである。経年劣化

で判別しづらいが、二基ともに三段にわたって討死者の姓名が列記されており、一基（位牌一）には三十五人、もう一基（位牌二）には十一人の姓名及び姓だけの記載が四十一人で、二基合わせて八十七人の姓名及び姓が確認できる。位牌一と位牌二では表記が異なり、位牌一は段ごとに姓名を記入するが、位牌二は左右端に三段抜きの一行書がある。左脇に「随一軍士五百八十三人討死 駿州勢合二千七百五十三人死実性名略」とあり、「人別」の討死者総数と一致する。なお、右脇には「松井兵部少輔宗信公勢七百騎内二百有余人討死」と記す。

「人別」にあつて「位牌」に名が無いのは、位牌が別に単体で存在する義元・松井宗信を除けば、「松平兵部」と「松平上野介政忠」の二人で、「位牌」にあつて「人別」にないのは「松平宗次」である。両記録の記載は一致しておらず、漢字表記に差異が見られる他、記載順も「位牌」の「斎藤掃部利澄」から「松平上野介忠政」までの二十八人分のみが一致するだけで、両記録の製作時期は異なると思われる。「位牌」の製作年は、「人別」より古いという印象はあるが、製作年代を推測する手がかりは無い。また、「人別」では「将監」を「将覧」のように誤読と思われる字や、複数の訂正箇所があるため、「人別」は、下書きに近い検証校訂本と考えられる。

長福寺には弘化三年（一八四六）に尾張藩の「寺社御奉行所」へ提出した什宝帳が遺されており、計十九品の内、左記の通り「今川義元公木像 壹鉢」・「鑑 壹足」・「鞞 壹本」・「鐘ノホ 壹本」の四品が、「三州江原村施主／渡邊文兵衛」より寄進されたとする。なお、天保七年（一八三六）の什宝帳も存在しているが、ここには「渡邊玄馬」からの「寄附」とする他、四品以外にも「鑑とふし」すなわち、鐘通しが一腰あつ

たことが記される。鎧通し以外は現在でも長福寺に現存している。

「三州江原村」は、現・愛知県西尾市江原町に比定できる地で、弘化三年の什宝帳に記される「施主」の「渡邊文兵衛」は、「人別」・「位牌」に名が記される「渡邊玄蕃清綱」を「先祖」とすると付記される。

鞆は、推定全長約一〇〇糎、下部幅約一二糎、上部幅約一〇糎を計るが、下部三五糎・上部六〇糎ほどで劣損分離しており、原形を留めない。鐘は鉄製の舌長鐘で、両什宝帳では「壺足」とするが左右で紋板・鉸具の形状が異なるため、本来「壺足」だったかどうかは疑わしい。左右ともに最大長二九糎前後、幅一二糎前後・高二七糎前後だが、変形しているため、正確な測量は難しい。「槍ノホ」は槍先の無い柄のみ遺る。

弘化三年の什宝帳の記述で注目されるのは、鐘のことを「佐々木形」と称していることである。この鐘については、縦二六・四糎、長二四・三・七糎の巻物・史料³「林阿弥の弥陀記・鐘記」が別に伝存している。後段の「鐘記」には、渡邊玄蕃は六角家援軍の二人を討ち取り、その武将の鐘を分捕ったものの、「木下」すなわち秀吉の謀略によって討死したとある。内容的に『絵本太閤記』に影響されたと考えられる部分も見られるため、「鐘記」の製作年代は江戸時代後期以降であろう。その内容自体の信憑性は薄いだが、鐘自体に六角家援軍の由緒が付随することに、長福寺周辺で継承された独自の合戦譚があったことを物語っている。

なお、長福寺には四品以外に松井宗信像が伝わるが、このいずれの什宝帳にも記載が無いことから、厨子扉銘のとおり嘉永二年（一八四九）に寄進されたとみてよからう。義元像の厨子扉にも「嘉永五年／子正月吉日」・「當村施主／梶野三左衛門」の銘があるが、松井像と同形式の厨

子であるため、同像に倣った厨子を後補したと考えられる。

三 六角家援軍の典拠

桶狭間合戦に六角家が援軍ないし援助を行ったことを記すのは、管見の限り江戸時代からすでに偽書とされた『江源武鑑』の他、正保年間（一六四四～四八）以降に成立した『三河後風土記』、大衆本として流布した『絵本太閤記』、尾張藩重臣・山澄英龍（一六二五～一七〇三）著で現存しない『桶狭間合戦記』を尾張藩士・田宮篤輝（一八〇八～七一）が弘化三年（一八四六）に校訂した『新編桶狭合戦記』⁵のみである。

『江源武鑑』は六角家の末裔を自称する沢田源内（一六一九～八八）の手になる著述とされており、創作を多分に含む記事が多く、信長や秀吉との関わりを必要以上に示すなど、その史料価値は無いとされている。『三河後風土記』は犬山城主・成瀬正成が編纂した書と仮託されていたが、幕府奥儒者・成島司直（一七七八～一八六二）により沢田源内の作と推定されており、『江源武鑑』ほどではないにせよ、全面的には信が置けない書物である。

『三河後風土記』では、信長が「今川家ト敵對シ国境ニ砦ヲカマヘ」たことで、義元が「大軍ヲ引卒シテ尾州発向」を催したため、信長は「吾勢計リニテハ彼大敵フセキガタシ」として、「江州ノ佐々木ニ加勢ヲ乞ント」と「使者ヲ佐々木六角義賢入道兼禎カ方ヘ」遣わせたとする。六角義賢は「早速同心シテ」兵を送ることを決め、「前田右馬助兼利 乾兵庫介実教」を大将として、「二千三百余騎」を送り、「左備」として合戦に臨んだことになっている。『江源武鑑』もほぼ同内容である。

そしてこの合戦で、四十名の主だった武将名を挙げて「随一ノ侍五百八十三人」が討死したとし、「都合三千九百七級」の首実検を行ったとする。なお、首実検数は「一説ニハ」として「二千五百余」との割註が付けられている。これに対して信長方は「討死五百八十余人手負ハ数知レス」、「佐々木カ加勢前田乾カ手ノ者討死三十七人」で、痛手を負った「山田十兵衛弓削左内上月兵部少輔」の三人は後日に亡くなり、「其外二百七十二人」が討死したとする。

『江源武鑑』では「乾兵庫介」の名は出てくるものの、尾張への援軍は「前田右馬頭」と「池田庄三郎」の二人で、軍勢数は「一千二百余騎」、「左備」を務めたとする。今川勢の討死者は二十五名の主だった武将の名を挙げて「此ノ外侍分五百八十三人 雑兵三千九百七人」が討死したとする。信長勢の討死は「八百三十騎」、援軍では「雑兵三十七人 討死疵ヲ負フ者二百七十二人ナリ」とし「山田十兵衛弓削左内 上月兵部」の三人が後日に亡くなったとする。

一方、寛政九年（一七九七）に初編が刊行された『絵本太閤記』では、六角家に援軍を求めたのは秀吉であり、六角家から「具足・旗差物・弓・鉄砲の軍器二千斗り」を「拝借」して、「道々の野武士」を糾合して「江州の援兵也」と偽り味方を励ましたという筋立てになっている。『新編桶狭合戦記』は「又一説ニ」として「信長江州佐々木義秀二千三百勢ノ援兵ヲ乞ヒ」とする一文を紹介するのみである。

書誌学的には『江源武鑑』・『三河後風土記』にある六角家援軍記事を、『絵本太閤記』では秀吉の手柄に脚色し、『新編桶狭合戦記』でその説の紹介を行ったという流れになろうか。いずれにせよ、裏付けが得られる内容ではない。

渡邊玄蕃遺品は、天保七年（一八三六）には長福寺に存在していたことを確認できるが、納入年は不明であるため、ある程度一般に敷衍したであろうこのいずれかの書の情報が、遺品の由緒に付随した可能性は否定できない。しかし、遺品由緒の情報源が刊行書籍の記述内容のみというのも違和感がある。少なくとも鎧を「佐々木形」とする伝承は、渡邊家独自の伝承ではなからうか。

なお、『江源武鑑』と『三河後風土記』で一致する数値は、今川方の討死者総数三千九百七人と六角方援軍の被害だが、『江源武鑑』では「雑兵三十七人 討死疵ヲ負フ者二百七十二人」とするのに対し、『三河後風土記』では「二百七十二人」分は「疵ヲ負フ者」ではなく「討死」とする。信長勢の討死者の数は『江源武鑑』では「八百三十騎」、『三河後風土記』では「五百八十余」と異なる。また、『江源武鑑』に記される今川方の主だった武将の数五百八十三人については、『三河後風土記』に記載は無く、『絵本太閤記』では「随一の勇士五百八十三人」とするが、討死総数は記されない。

「人別」に著された数値では、討死した「随一之勇士」の「五百八十三騎」と、「近江国佐々木方カ加勢」の討死「式百七拾式人」は『江源武鑑』の数値と一致するものの、今川方の討死者総数「式千七百五十三人」や、織田方の討死「九百九十余」はいずれとも異なる。

『三河後風土記』に記される今川方で討死した主だった武将は、「義元ノ叔父榊原宮内少輔氏政」以下四十名、『江源武鑑』は「義元甥久野半内」以下二十五名、『絵本太閤記』では「義元の叔父蒲原宮内少輔氏政」以下四十名が記される。「人別」に記載された人物で義元を除く四十七名と一致するのは、『三河後風土記』では三十六名、『江源武鑑』では十八

名、『絵本大閤記』では三十五名で、表記も異なるため、長福寺の記録はこれらの書を直接参照したわけでは無いことは言える。

ちなみに『朝野舊聞褒藁』における「東照宮御事績」巻十四⁶で引用されている記録の内、討死者名や討死者数を記す記録は下記の通りである。

(別紙「諸記録にみる桶狭間合戦討死者一覧」参照。)

〔松平記〕 討死者名記載十五名 討死者「六十餘人」

〔御年譜附尾〕 討死者名記載十七名 討死者「六十餘人」 討死者総数「二千五百餘」

〔御先祖記〕 討死者名記載四十二名 討死者「六十餘人」

〔落穂集〕 討死者名記載三名 討死者総数「二千五百人」

〔武徳大成記〕 討死者名記載十一名 討死者総数「二千五百餘級」

〔武徳編年集成〕 討死者名記載四十六名 討死者総数「騎士五百八十三人 雑兵二千五百 或三千五百七」

〔總見記〕 討死者名記載二十四名 討死者総数「二千五百」 「又三千トモ云」

「人別」及び「位牌」に記された武将名は、表記や諱の違いは別にして、その大半はこれらの書で姓名を確認できるものの、いずれも書とも記載内容は一致しない。また、「人別」に記された中で、「竹下孫八右衛門」・「江原丹波守光宗」・「渡邊玄蕃清綱」の三名、「位牌」の「松平宗次」はいずれの記録にも記載がない。このことより、両記録にある姓名は、少なくとも特定の書を丸写ししたわけではないことはいえる。

ちなみに、史料的价值が高いとされる『信長公記』⁷で挙げられている今川方の武将名・近習名は、「山口左馬助」・「同九郎二郎」・「岡部五郎兵衛」・「かつら山」・「浅井小四郎」・「飯尾豊前」・「三浦左馬助」・「山田

新右衛門」・「松井五八郎」・「服部左京助」及び「下方九郎左衛門」の十一名で、討ち取った首数は「三千余」とする。

おそらく、「人別」及び「位牌」は長福寺独自の検証結果の反映と考えられる。「人別」で「庵原忠春」の下に「庵原右近太夫」・「庵原庄次郎」と書くのは、書によって異なる名を検証した跡と思われ、抹消線があるのもその検証の過程で重複と思われる名を消した痕跡であろう。「渡邊玄蕃清綱」は、その末裔から遺品を寄進されたことで判明したと考えられる討死者である。また、史料4「義元公御霊像記」には、「御血縁江原丹波守」の末裔と寺との関わりに言及する箇所があり、「江原丹波守光宗」なる人物も、「渡邊玄蕃清綱」同様、末裔からの情報だったと考えられる。

おそらく、長福寺は江戸時代を通じて今川方の討死者を弔ったことで、先祖供養を依頼されるといった機会があり、他書には無い討死者を加筆できたのだろう。表記の類似性でいえば、「武徳編年集成」の記載内容と近いものの完全に一致しないため、多様な書が参照されたと思われる。位牌二にある姓だけの表示は、あるいは『新編桶狭合戦記』⁸などでも列されている徳川方参陣者名からの連想とも考えられるが、記載姓名の典拠淵源を辿ることは現時点では難しい。

なお、「人別」に記された中で、『寛政重修諸家譜』において桶狭間合戦での討死が確認できる武将は「西郷内蔵介續雄」・「井伊信濃守直盛」・「松平上野介政忠」¹⁰の三名と、「位牌」のみに記される「松平宗次」¹¹だけである。同書巻第四百三十に「久野三郎四郎元宗」という人物が桶狭間合戦で討死したとの記載はあるが、「人別」の「久野半内氏忠」と同一人物か否かの判断は出来ない。

五 長福寺桶狭間合戦伝承の真偽

桶狭間合戦に近江六角家が援軍を出したか否かについては、現存する当時の史料からは全く確認が出来ず、偽書とされた『江源武鑑』や、その著者が作者と推定される『三河後風土記』等の記述に留まる限り、信憑性に疑いがあると言わざるを得ない。しかし、小林正信氏は援軍の有無に関する言及はないものの、その可能性があったことを示唆している¹²。その典拠とするのが、桶狭間合戦二箇月後の永祿三年（一五六〇）七月二十一日に著された「六角承禎〔義賢〕条書」〔草津市蔵¹³〕である。六角承禎（義賢）の子・義弼（後の義治）と美濃国の一色（斎藤）義龍の娘との婚姻について、父・承禎が猛反対し、その反対理由を書き連ねて義弼家臣に宛てた条書である。

全十四箇条にわたる反対理由の内、第十二箇条目に次の文言がある。

一 越前とハ不通^二なり 斎治申合対様成へからず 殊／揖斐五郎拘置
入国内談之由候 尾州^ニ急^与可有馳走由 美濃守殿／江申談由候 然^著彼
両国より濃州へ出張之時 当方働可／有如何候哉 美濃守殿すて、
さへ有へき^ニ 当国出勢／何と被存候哉 越州 尾州其覚悟手宛有へ
く候 其上／此方働一切不可成事候 旁以天下之ほうへん 此時候事

越前国の朝倉家と不仲になっており、美濃国の「斎治」（斎藤治部大輔・當時は一色義龍）の娘との婚姻で関係はさらに悪化する・朝倉家が保護している土岐一族の「揖斐五郎」を美濃国へ戻すことが出来なくなり、尾張国の織田家も支援することを六角家に亡命中の「美濃守殿」（土岐頼芸）にも約束している。もし婚姻を行ったならば、越前国朝倉家・尾

張国織田家が美濃国へ侵攻する時、我々はどうすればよいのか。「美濃守殿」を見捨てることになり、美濃国への侵攻は何と思われるであろう。越前国朝倉家も尾張国織田家も土岐家再興の覚悟で準備している。そうなれば我々は動けなくなり、天下の批判を受けることになる。と意識できようか。

小林氏は、武田家・北条家・今川家との甲相駿三国同盟に対し、十三代将軍足利義輝を中心とする諸国同盟が存在したと説明されているが、この見解の是非は本稿では問わない。この条書で重要なものは、朝倉家が保護する「揖斐五郎」や、六角家が保護する「美濃守殿」を美濃国へ戻す、すなわち一色（斎藤）家と敵対することに対し、六角・朝倉・織田の三家が永祿三年時点で連携していた形跡が確認できることである。

ただ、六角家・朝倉家による土岐家再興が叶えば、両国にとって美濃国を影響下におけるという利点があるが、土岐一族を手中にしている織田家にとってこの連携に加担する積極的な利点が見いだせない。あるとするならば、尾張国の背後を牽制する役目を六角家・朝倉家に担ってもらうことであろうか。

桶狭間合戦は、信長の家督時に離反した山口左馬助・九郎次郎父子の鳴海城及び、山口父子によって調略された大高城・沓掛城を奪還するため、鳴海・大高両城を包囲する砦を築いたことが直接の原因である。短期的にみれば今川勢出兵の口実を作ったのは信長であり、前年に尾張国岩倉の織田伊勢守家を下して背後を固め、南方の鳴海方面への侵攻が可能となったことで、信長側が仕掛けた衝突である。境目の城を攻撃すれば、今川家から一定数の後詰が発せられることも想定範囲でなければならず、兵数において圧倒的不利な状況下で行われたとするならば無謀

な挑発である。戦を仕掛ける限り、信長方にも相応に対応できる互角に近い兵数の準備がなければならぬ。信長勢は少数だったという見解は見直す必要がある。

今川家にとっても尾張侵攻を確実にするには、織田家の背後を脅かす上で、織田家と敵対する美濃国一色（斎藤）家と連携するのが、当時の常道だが、現在のところ同家が動いた形跡を史料的に見出せない。

「六角承禎〔義賢〕条書」から推測されるのは、桶狭間合戦を行うにあたって、六角家・朝倉家との連携に基づき、美濃国一色（斎藤）家を牽制する役割を両家に担ってもらったのではないかと仮説である。六角家・朝倉家との連携にあたり、織田家側が求める利点は甲相駿三国同盟を背景とした今川家に対抗できる状況を作り出すことにあり、六角家・朝倉両家が何らかの行動を起こすことで、美濃国一色（斎藤）家の動きを封じれば連携の成果となる。見返りは、六角家・朝倉家が美濃国へ侵攻する際に、南方からの牽制・支援であろう。

一色（斎藤）義龍の娘と六角義弼との婚姻が成立したか否かは定かではないが、平成二十六年（二〇一四）に発見された米田家文書¹⁴の内、永禄九年に比定される「一色藤長・三淵藤英連署状 菊川殿宛」によって、この時点までの六角家と織田家との関係が継続されていたことが判る。

御退座之刻 其国以馳走／無別儀候 然^者為 御入洛御供／織田尾張守
参陣候 弥被頼／思食候条 此度別被抽忠節様／被相調^者可為御祝着之
由候／仍国中へ御樽可被下候間／此等之通被相觸 参会之儀／可被相
調候 定日次第可被差越／御使候 猶巨細高勘 高新 富治豊／可被申候
恐々謹言

八月廿八日 藤英（花押）

藤長（花押）

菊川殿

ここでは、六角家に庇護されている足利義秋（義昭）を上洛させるにあたり、信長が味方になったことを報じている。しかしながら、この書状が認められた直後に六角家は義秋（義昭）と敵対する三好三人衆と提携したことで、信長とともに上洛する計画は頓挫した。桶狭間合戦での六角家援軍は、一連の偽書を製作したとされる沢田源内による創作かもしれないが、桶狭間合戦当時の尾張国を取り巻く近隣関係をみた場合、桶狭間合戦は単に織田家対今川家の争いに留まらず、今川家が甲相駿三国同盟を結び尾張侵攻に備えたと同様、織田家側もこの同盟に対抗する背後固めを行っていたと推測できないだろうか。

おわりに

「人別」に著された「近江国佐々木方之加勢」の真偽については残念ながら、良質の史料で確認することはできない。しかし、この記録は一連の偽書とされる書籍から単純に引き写された内容でもない。「位牌」のみに記される「松平宗次」は、宮石松平家の家譜でしか桶狭間での討死が確認できないため、両記録は長福寺が独自の検証・情報収集によって製作したと推測される。

六角家援軍の逸話は、十七世紀半ば頃には紹介されていた『江源武鑑』・『三河後風土記』や、十九世紀には大衆本として広まった『絵本太閤記』には記述されているため、ある程度敷衍していた情報であることは確か

で、「人別」はその情報を取り入れた可能性は否定できない。しかし、今川方の討死者総数や、織田方の討死者数は、両書の情報と異なるため、別の情報源があったことも想起できる。長福寺が把握する六角家援軍情報は、渡邊玄蕃の遺品に正誤や詳細は別にして、もともと附属していた情報も加味されていると思われる。

六角家の軍勢が桶狭間に展開したことは証明できないが、「六角承禎〔義賢〕条書」の内容により、合戦当時、織田家と六角家・朝倉家とは連携関係にあったことは想定できる。軍勢派遣とは言えないまでも、背後の一色（斎藤）家を牽制するなど、織田家を間接的に支援した可能性を指摘できるのではなからうか。足利義秋（義昭）上洛をめぐり、六角家と織田家は永禄九年までは提携関係にあったことも傍証となろう。

蛇足だが、『信長公記』には、今川勢到来の報に接しても決断を行わず奥へ退いた信長に対して、家老たちは「運の末には智慧の鏡も曇るとは此節なりと、各嘲哂候て罷帰へられ候。」と嘆いた記事がある。素直に読めば、家老たちは信長のことかつての「大うつけ」と見下しているわけではなく、「智慧」のある者と評価している。言葉を裏読みすることは慎まなければならぬが、義元の甲相駿三国同盟に対抗する策をこの時点で作り出していたとしたら、そういう評価にも合点がいく。

本稿で紹介した記録の裏付けは得られないが、既存の史料だけでは補えない内容を含んでいることは確かで、長福寺周辺で独自の情報が存在したことは確認できた。地元伝承は史料的裏付けが取れない反面、あるいは一片の真実を内包する可能性も捨てきれない。歴史の一片として記憶に留めることも必要だろう。

註

- (1) 藤本正行「異説・桶狭間合戦」（『歴史読本』一九八二年七月号 人物往来社 昭和五十七年発行）。後に「信長の戦国軍事学」（洋泉社 一九九七年十二月発行。）等に再録。
 - (2) 羽賀祥二「史蹟論 19世紀日本の地域社会と歴史意識」（名古屋大学出版会 一九九八年発行）。
 - (3) 平成二十九年（二〇一七）七月十五日より九月十日まで開催した徳川美術館・名古屋市蓬左文庫特別展「天下人の城―信長・秀吉・家康―」で出品。
 - (4) 「庵原忠春」とは別に「庵原右近太夫」の名が書かれているが、「位牌」では「庵原右近太夫忠春」としているため、「庵原忠春」と「庵原右近太夫」は同一人物とした。「松平兵部」は重複記載。
 - (5) 豊明市史編集委員会編『豊明市史資料編補二桶狭間の戦い』（豊明市 平成十四年三月発行）所収。
 - (6) 史籍研究会「内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第一 朝野舊聞叢藁」第二卷（及古書院 昭和五十七年八月発行）。
 - (7) 奥野高広・岩沢原彦校注『信長公記』（角川書店 昭和四十四年十一月初版発行）。
 - (8) 『寛政重修諸家譜』卷第三百六十九。ただし同書では諱を「俊員」とする。
 - (9) 『寛政重修諸家譜』卷第七百六十。井伊直政の祖父にあたる。
 - (10) 『寛政重修諸家譜』卷第四十。長澤松平家。室は松平清康の女。政忠歿後、酒井忠次に嫁ぐ。
 - (11) 『寛政重修諸家譜』卷第十六。宮石松平家。
 - (12) 小林正信「信長の大戦略 桶狭間の戦いと想定外の創出（ディスロケーション）」（里文出版 平成二十五年八月発行）。
 - (13) 小林氏前掲論文での表記は「春日貞一郎氏所蔵文書」。岐阜県編『岐阜県史資料編 古代・中世四』（岐阜県 一九七三年発行。）に所収。
 - (14) 熊本大学附属図書館蔵。
- 追記 本稿執筆にあたり資料閲覧の便をはかっていた和光山天沢院長福寺御住職・小山昌純氏、情報をご提供いただきました全国目加田会・目賀田一郎氏に厚く御礼申し上げます。

史料1「古戦場討死人別」一冊(六丁) 縦二四・〇糎、横一七・二糎

(表紙・第一丁表)

「今川松井両公奉安所」(朱文方印)

「尾州桶狭間長福寺」(朱文方印)

「古戦場討死人」(別カ)

(第一丁裏) 白紙

(第二丁表)

討死人別

義元公甥(マ)

一 久野半内氏忠

妹(マ)

一 浅井小四郎政繁(マ)

一族

一 江爪民部太輔親良

旗奉行

一 三浦左馬介義就

(第二丁裏)

後陣旗頭

一 就安(マ)藝守基清

旗奉行

一 庵原美作守基政

鐘奉行

一 伊豆権ノ頭元利

軍奉行

一 古田武蔵守氏政

左り備へ大将

一 岡部甲斐守長貞

(第三丁表)

前備へ大将

一 藤枝伊豆守氏秋

先陣大将

一 朝比奈主計介秀詮

一 斎藤掃部介利證

庵原右近太夫

一 庵原布

忠春 庵原庄治郎

一 庵原将覧(監カ)忠鎮

(第三丁裏)

一同 彦次郎忠良

一 牟礼主水正泰慶(ムレ)

一 西郷内蔵介續雄

一 冨塚修理 元繁

一 松平次右衛門

一 松平撰津守雅信

同 兵部 同討死

一 冨永伯耆守氏繁

(第四丁表)

一 四ノ宮右衛門佐光国

一 松平兵部 親將

(第五丁裏)

一 上和田雲平光範 是八三河岡崎分下

戰死合式千七百五十三人^七

一 塩井内蔵介実雄

一 今井主馬介忠宗

一 山田土佐 同討死

(第六丁裏)
駿遠參御大將

一 平山市之丞 秋廣 山田新右衛門

一 由比美作守正信

一 福井主税介忠重

一 松井公

一 石川新左衛門康盛

一 江原丹波守光宗 是八三河江原城主

山蓮院

(第四丁裏)

一 関口越中守親勝 十齋藤掃部

一 渡邊玄蕃清綱 同上荒井村出生

寂應自空大居士 「尾州桶狭間長福寺」
(朱文方印)

一 井伊信濃守直盛 由トモ有

(第五丁裏)

一 嶋田左京進持近 一 葛山中務大輔

一 岩瀬甚介清次 郎 是八三河吉良出生

此外信長勢討死 九百九十有余人 此内式百七拾式人ハ
近江国佐々木方之加勢

一 飯尾豊前守顯慈 一 竹下孫八右衛門

籟本隨一

一 松井五郎八宗信 但シ松井八郎とも言

(裏表紙・第六丁裏)
「今川松井両公奉安所」(朱文方印)
「長福寺」(朱文丸印)

一 津田長門守親頼

一 松平上野介政忠 是八三河国長沢村城主

一 岡崎十兵衛忠実

此外不詳隨一之勇士
五百八十三騎討死

史料2「今川勢討死者位牌」二基

(碑面) 各上幅二〇・九糎 各下幅二〇・八糎 各高縦三〇・三糎

各厚一・〇糎

(台座) 各幅三三・四糎 各高六・五糎 各奥行四・八糎

(総高) 各三六・八糎

〔位牌一〕

左備大将

旗奉行

(中段)

富永伯耆守氏繁

関口越中守親勝

(上段)

岡部甲斐守長貞

三浦左馬介義就

斎藤掃部介利澄

四ノ宮右衛門佐光國

井伊信濃守直盛

戦死拝霊

先陳大将

一族

庵原右近大夫忠春

松平兵部親将

嶋田左京進持近

ハタ奉行

朝比奈主計介秀詮

江爪民部太輔親良

同 将監忠鎮

塩井内蔵介實雄

飯尾豊後守顕慈

庵原美作守元政

前備大将

妹婿

同 彦治郎忠良

(下段)

津田長門守親頼

ヤリ奉行

藤枝伊豆守氏秋

浅井小四郎政繁

牟礼主水正泰慶

松平治右衛門信輔

岡崎十兵衛忠實

伊豆権ノ頭元利

後陳奉行

久野半内氏忠

西郷内蔵介續雄

由比美作守正信

上和田雲平光範

軍奉行

乾安芸守元清

富塚修理元繁

松平摂津守雅信

石川新左衛門康盛

今井主馬介忠宗

古田武蔵守氏政

松平撰津守雅信

石川新左衛門康盛

平山市之亟秋廣

〔位牌二〕

(表面右側書)

松井兵部少輔宗信公勢七百騎内二百有余人討死

(表面上段)

松平上野介忠政

松平 宗次

(表面中段)

浅井天野酒井某

足立内藤三浦某

福井主税之介忠重

山田土佐守

葛山中務大輔

岩瀬甚介郎清次

赤松青山中川某

黒柳 高木 鶴殿

江原丹波守光宗

山田新右工門

温井藏人

山口某服部某林氏

遠山 大久保氏

石川 武田 今川

渡邊玄番清綱

竹下孫八右工門

水野某加藤某

鳥井本多榊原氏

(表面下段)

戸部長井畔柳氏 土方 井上 三宅
太田伊藤土井田村 吉田 山本 早川 植村 伊東 久世

(表面左側書)

随一軍士五百八十三人討死 駿州勢合二千七百五十三人死 実性名略

(裏面)

為慈空僧俗菩提造之

史料3「林阿弥の弥陀記・鑑記」一卷 縦二六・四糎 長二四三・七糎

林阿弥の弥陀記

抑此尊像の由来を尋奉らんと欲するに 未夕何れの聖者の真作といふ事を知らず 往古守屋退治の砌より当家傳來の尊像也 然るに永禄三年庚申今川公御上洛の御催既^二近寄^一五月雨陣續き寂寞たる夜中二御城の庭前にあやしき聲有りて曰じくし柿くく鳴海のはてそ憐れなりけりと三度呼聲を聞諸士の面々より御上洛御延引の御かんけんを申上れとも 義元公是を用ひ給ハす 夜も明ケ方に近よれハ四万餘騎の軍勢を引率して駿河を御出馬有り 爰に林阿弥と申僧ハ御大将の俗兄也 然ルに此僧其夜の夢に不思議なる哉 往古内佛安置の弥陀如来告て曰く汝今より義元の跡を尋ぬへし我守りて汝か劔難を助んとの御告をこふむり思ハすも如来を負ひ奉りて見え隠れに來らせ給ふに案にたかわす秀吉の謀事

にかり討死と相成実^一に鳴海のはてそ憐れなりけり 御大将を始式千七百五十三人の死骸を弔らひ 此尊像ハ當山に納め 彼僧ハ本國へ歸られ給ふ 其後住僧聖阿御告の事ありて俄に觀勢の二菩薩を添へ奉るはや併しより此かた當山に劔難よけ弥陀と申奉るハ此尊像也 告縁の為に拜令むる者也

鑑記

是なる鑑ハ永禄三年源の義元公御上洛^二付當國清須^一城主平信長軍勢少き事をなけき 近江國佐々木義賢入道承貞公へ羽柴筑前守を使者として一千五百騎の武具馬具を借用せんと御頼ミ入あり けれハ 則近江城主近國の鍛冶を集め俄^二武具馬具を^一作らせ 前田左馬介兼利乾兵庫介實教を兩大将として千五百餘騎の軍勢を差

添／信長へ御加勢有り然りと／いへとも今川家四万餘騎の／多勢に
おされ 十八日丸根／鷲津の両城を攻落し／此日渡邊玄蕃尉 佐々木の
／加勢二人の首を今川家へ／かきとられ高名有といへとも／木下の謀
計により不意に／討れ此夜むなしくなり／給ふ 右玄蕃菩提の為に／
當山に寄附せられし佐々木／形のあふミと申ハ是也
尾州桶狭間／長福寺

史料4「義元公御霊像記」一卷 縦二六・三糎 長二二〇・六糎

義元公御霊像記

抑たんに安置奉るハ今川／治部大輔源の義元公の御霊像也／此由来
を尋るに 永禄三年／庚申の五月御上洛の御望ミ／有之駿遠參三ヶ國
の軍兵を／引率して尾州桶狭間に着陣／し給へハ 四万五千餘騎の軍
勢／野にミち山に満ち 御大将／破竹の御勢ひ弥増 既二十九日／卯ノ
上刻より軍始り丸根 鷲津／両城を攻落したる注進ハ／櫛の齒を引か
如し 御大将悦喜／心御氣立顯れ 陣中に酒宴を／催し 人馬の勞れを休
めゆく／寛々時をうつし給ふ所に／後の山より織田の先陣平手／監物
木下藤吉を始 諸軍／一度に攻寄れハ 陣中殊の外／騷立 四方を窺へと
も車軸を／流す大風雨の夜陰なれハ／防くへく手立もなし 味方の／
軍勢過半討死 御大将義元公／騷き立せ給ふ所へ服部小平太／忠次 鐘
をしこいて御膝元へ／突か、れハ 義元すかさず小平太を／切伏せ給
ふうしろ合毛利新助ニ／組ふせられ 此場てはかなく成らせ／たまふ事
御いたわしき次第也／爰に遠州二俣の城主松井／兵部少輔宗信 山の

半後に有て／陣中の騷動を窺ひ大將軍の／御身御伺あらんとかけおり
見／給へ共 最早敵の手にか、らせ／給へハ 松井無念骨髄ニてつし／
組下の者共之前テ曰く誠に／今日今川家の滅亡天運の／極る所也 我
既ニ黄泉の御供／せん 猶此上ハ我死骸を此所に／うつめ汝たち跡に残
りて／主君今川と我菩提を弔らへ／との仰ありて切腹し給ふ／忠儀の
程はそかんしたり 大勇／の諸土方

岡部甲斐守 藤枝伊豆守 松平上野介／同撰津守 古田武藏守 伊豆庵原
／乾 三浦 江爪 浅井 久野 齋藤／朝比奈 牟礼 富永 伯耆守 四ノ宮／西
郷 松平 兵部 同治 右衛門 由比／石川 関口 井伊 嶋田 飯尾 津田／平山
福井 江原 山田 渡邊等

一騎当千の大將五百八十三騎討死／其外死卒数うるに暇あらし／三千
有余人の死骸山の如し 爰に／同朋林阿弥と申僧 諸宗の寺院を／頼て
御弔らひ有之 法事の／雑物布施として寺々へ納め／あわれと共に本
國へ帰り給ふ／其後駿府合党山へ寄附の諸品ハ／永禄三年六月と寛文
五年／十二月両度に焼失せり 再建の／御霊像ハ御血縁江原丹波守／
渡邊玄蕃尉合寄附せられたり／併合此かた御菩提のために／毎歳五月
十九日古戦場に／おゐて當山の大施餓鬼修行／ふん墓の供養ハ國家安
全の／為也 一度参詣の輩ハ夏病ミ／消除うたかひなし 称名の聲／諸
共に謹て拝礼とけられよ

御位牌／天澤寺殿四品前禮部治郎秀峰哲公大居士

尾州桶狭間／長福寺（黒丸印）

《Title》

Presentation of historical documents: A study on historical materials related to the battle of Okehazama owned by Chofukuji temple

《Keyword》

Battle of Okehazama, Chofukuji temple, *Kosenjo-Uchijini-Ninbetsu* ; Necrology of military commanders died in the battle of Okehazama, Buddhist mortuary tablets on which the names of dead Imagawa clan's military commanders of the battle of Okehazama were written, *Rin'ami-no-midaki Abumiki*; Record of principal Buddha of Chofukuji temple and Record of stirrups left by Watanabe Genba, *Yoshimoto-Goreizoki*; Origin of the figure of Imagawa Yoshimoto, Origin of stirrups left by Watanabe Genba, Reinforcement of Rokkaku Army, *Kogenbukan*; Record of Rokkaku family, *Mikawa-Gofudoki*; History of Mikawa Province; Ehon-Taikoki; Biography of Toyotomi Hideyoshi.